

第1回とやま世界こども舞台芸術祭

開催趣意書

「権力、武力などを通して、一元的に支配しようとする」ところに争いは絶えない。今、世界の各地で、それぞれがそれぞれの正義を掲げ、絶対者を信奉して、他を従え、自己を最高者に仕上げようとして、狂気の振る舞いと、殺戮が行われている。他者の存在を許容することさえあり得ないと言わんばかりである。

人間の英知を期待して待ち望まれていた二十一世紀も、既に六年を経過したが、覇者であろうとする人間の愚かしさは、むごい流血、暴力的殺害など、ヴァイオレンスの横溢を押し止めることさえ出来ていない。「無垢」に生まれながら、生半可な「知識」に唆されて禁断の木の実を口にして以来、「経験」に汚され、「世俗」に冒され続けてきた人間には、楽園の回復はあり得ないのだろうか。

「あり得ない」としか言えないように思える。だが、様々な違いにもかかわらず、時と所を同じくして、同じ体験を共有することで、こどもたちが素直に互いに親しみ、理解し合い、相互理解と友情を育んで行く姿を、私たちはこれまでに開催してきた「こども演劇祭」を通して見ている。そこに、唯一の期待を見いだすことが出来るのだ。

これまで「演劇」を通して世界のこどもたちが富山で集う機会を持ってきたが、演劇の枠を「舞台芸術」にまで広げて、こどもたちの交流の場を構築することを考えるのは、演劇だけでなく、音楽に、舞踊にと、広く芸術に関わって心身の訓練と錬磨に取り組んできたこどもたちが、親しく触れ合う機会を持つことで、互いに異質な価値の存在を知り、新しい創造の可能性に目覚めることが出来ると思うからである。

芸術であれ、学問研究であれ、順調に進歩してきたものが、停滞した泥沼状態に陥ることがある。自分の枠の中だけでは、どれだけ努力を重ねても抜け出すことが出来ない。解明の閃きを得ることが出来ず、苦悶を続けるとき、全く分野の違ったところから天啓を得ることがあるのは、過去にその例をあまた見るところである。

世界の各地でそれぞれに研鑽相務めているこどもたちが、富山に集まって一時生活を共にし、体験を分かち合って、異文化の価値を知り、異なった国に友人を見いだす。望ましい共存の場では無かるうか。これまでに七回の国際アマチュア演劇祭を成功させ、世界の注目と関心を集めている富山で、世界こども舞台芸術祭を企画する由縁である。

とやま世界こども舞台芸術祭実行委員会

会長 平田 純